

ある私小説家の肖像

古木鐵太郎について

▶横山修一郎

はじめに

手元に一枚のチラシがある。



「企画展 没後60年 追憶の私小説家 古木鐵太郎展」と記されている。写真の人物が古木鐵太郎（こぎてつたろう）その人、鹿児島県宮之城村出身の小説家である。

「古木鐵太郎展」は、2014（平成26）年2月13日から5月12日まで、かごしま近代文学館で開催された。手元にあるチラシは、この展覧会開催以前にかごしま近代文学館を訪れた際に、偶々手に入れたものである¹⁾。

残念ながら筆者は、「古木鐵太郎展」を鑑賞する機会に恵まれなかった。しかしながら、チラシにある古木鐵太郎の肖像写真になぜか心惹かれた。まるで「誰もが懐かしさを感じる父親」みたいな表情だと思ったのだ。何も構えることなくレンズを見つめるその表情に眼光の鋭さはない。だからかえって親しみやすい。あくまでも私見であるが。

この一枚の写真から「作家古木鐵太郎」に興味を抱くようになった。

古木鐵太郎とは、いったい何者なのか。どのような作品を執筆し、どう評価されてきたのか。順を追って確認および考察していきたい。そして、文学史に埋もれた一作家にささやかながら光を当ててみたい。

1. 古木鐵太郎という人

1-1 経歴

「古木鐵太郎展」のチラシの裏には、古木鐵太郎の経歴がごく簡単に記されている。要約すると次の通りだ。

古木鐵太郎は、1899（明治32）年、鹿児島県薩摩郡宮之城村（現在のさつま町）に生まれた。二十歳のとき、同郷の先輩で改造社社長山本實彦を頼って上京する。そして、改造社の社員となり雑誌『改造』の編集者の一人となった²⁾。

やがて古木は、志賀直哉（1883–1971）や武者小路実篤（1885–1976）らの作品に触発されて小説家を志すようになる。二十八歳で改造社を退社し、記者時代に葛西善蔵（1887–1928）の勧めで執筆した随筆「日光湯本にて——都の妻へ」を発表し、作家デビューを果たす。以後、素朴な文章、静かな語り口で、自身の家族や故郷の思い出などを題材に私小説を書き続けた。小説「子の死と別れた妻」は芥川賞候補にもなった³⁾。作家として生前は不遇をかこった。

古木鐵太郎は、1954（昭和29）年3月2日、五十五歳で亡くなっている⁴⁾。

1-2 志賀直哉と武者小路実篤

古木が携わった改造社の雑誌『改造』は、当時『中央公論』と並ぶ総合雑誌である。改造社の山本實彦は、いわゆるやり手社長である。加賀豊彦作『死線を越えて』を世に出した。これがおおいに売れた。改造社の経済的基盤は固まり、バートランド・ラッセルやアルベルト・アインシュタインを招聘し講演会を行った。また円本と呼ばれる一冊一円の『日本文学全集』発刊など当時の出版界に大きな衝撃を与えた⁵⁾。志賀直哉、武者小路実篤、葛西善蔵は、『改造』において作品を発表している。

古木鐵太郎は、改造社に縁故入社した。そして、改造社に入社して半年ほどで、志賀直哉の担当を前任者から引き継ぐ。当時、志賀直哉は、『改造』に「暗夜行路」を連載中だった。古木は、志賀のもとを頻りに訪れて原稿のやり取りをする。志賀は、千葉県我孫子市の手賀沼のほとりに住居を構えていた。

古木は、志賀邸からの帰りの汽車の中で、書きあがったばかりの「暗夜行路」の原稿を最初に読むという幸運に恵まれた。

それ（「暗夜行路」）を読んだ時、これまでいくつか読んだものとはちがった面白さをそれに覚えたのである。何といふか、それはそこに書かれてある事柄が、不思議に直接な感じを持って自分の心に入って来る様な気がしたからである。何の飾り気もない、素朴なその文章が強く心に響いてくるからであった。⁶⁾（下線および括弧内補足は筆者、以下同様）

武者小路実篤の「或る男」が、その後『改造』に連載される。部屋を訪れた友人に、「武者さんの小説を読もうと思へば、こゝにすればいゝなア」⁷⁾と言われるほどに、古木は武者小路の作品世界にも強くひかれた。

私は志賀氏や武者小路氏の小説を若し読まなかつたら、いや読んで大して興味を覚えなかつたら、自分でも書いてみようなどとは思はなかつたらう。何故かと云へば、志賀氏の小説、殊に武者小路氏の小説からは、何の飾り気もない自由な文章で、こんな風にかいていゝものなら、自分だつて小説が書けないこともないだらう、といふ気がしたのである。⁸⁾

1-3 葛西善蔵

古木にとって志賀直哉や武者小路実篤が、文学への扉を開いてくれた存在だとするならば、葛西善蔵は、古木の背中を直接押した存在だといえるかもしれない。

私が初めて自分の文章を活字にしたのは、今から丁度十年前、『鸚鵡』といふ新聞形の同人誌に、八枚くらいの随筆を載せた、その時である。（中略）私が退屈しているのを見て、「あなたも何か一つ書いたらいいでせう」と葛西氏が云ふので、その時其処で書いたのがその随筆だった。⁹⁾

そのとき葛西善蔵は、「日光湯本にて一田舎の妻へ」という題名で作品を執筆していた。古木は担当編集者だった。原稿を待つ間、古木は葛西善蔵に勧められて「日光湯本にて——都の妻へ」を書いた。1926（大正13）年のことである。

古木は二十五歳だった¹⁰⁾。

古木鐵太郎作「日光湯本にて——都の妻へ」は、1931（昭和6）年、同人誌『鸚鵡』に発表される。退屈しのぎに書いた作品である。しかし、作家古木鐵太郎が世に出した最初の作品となった。その後、古木は、同人誌はもとより『早稲田文学』『三田文学』『文學界』などに作品を発表し続けた。

葛西善蔵について、キーンは「葛西の小説を読むのは辛いこと」であり、「そこに描き出されているのは自己を破壊することで初めて書くことができた作者の自画像」である、と指摘している¹¹⁾。実際、葛西善蔵は一筋縄ではいかない人物だったようだ。

古木鐵太郎は、葛西のそのような「自画像」と直接向き合った。

「椎の若葉」といふ小説は、あれは私が談話筆記したものである。勿論談話筆記する時は酔ってからされるので、筆記するにも大変は大変だった。（中略）談話の途中で、葛西さんは何べんも小便に起つやら、墨をすつて唐紙に大きな字を書いてみたり、いよいよ酒が廻つてくると、四つん這いになつて犬の小便する真似をして部屋中を這い廻つたり、それかと思ふとお国の岩木山に登る年中行事の時の唄を口ずさんでみたり、千変万化の振舞をされるのだった。¹²⁾

その場から逃げ出したくなるような強烈な個性である。古木鐵太郎は、まさに「自己を破壊」しながら書く作家葛西善蔵と相対している。しかもよく見ている。そして、葛西善蔵は、古木にとって最も思い入れのある作家となった。

自分は今になって初めて葛西さんの作家生活といふやうなものが朧げながら分かるような気がするのである。葛西さんはあの苦しい生活の中から、小説を書きつづけてゆかれたのだ。（中略）じぶんはよく葛西さんの仕事をされる様子を傍で見てゐたが、それは実に真剣な感じのものだった。（中略）この頃仕事をしてゐる時、ふと葛西さんのあの仕事をされる時の真剣な様子を思ひだすと自分の萎びかける頭も何となく鞭打たれる思ひがあるのである。¹³⁾

知り合いのつてを頼って上京した二十歳を過ぎたばかりの青年が、たまたま出版社に入社した。マスコミ志望でも作

家志望でもなかった。仕事で様々な作家たちと接するようになったに過ぎない¹⁴⁾。しかし、目の前で書き上げられた文豪たちの作品をいち早く読む機会に恵まれた。彼らの手書きの文字を一言一句確認し、校正作業も行った。さらに曲者作家の発する言葉を耳で聞いて、それを文字に起こす口述筆記もした。何よりも作家たちの生きざまを見たはずだ。

古木鐵太郎にとって、『改造』での日々は、結果的に作家になるための修行の日々となった。

わたしはいろいろの小説家に会へることがうれしかった。(中略) 私はこれまであまり小説など読んだことはなかったが、校正などで読む機会も多くなり、もし自分が小説家になれるものなら勉強してなりたいたいものだと思つたりした。¹⁵⁾

1927(昭和2)年8月、二十八歳のとき古木鐵太郎は改造社を退社する。

2. 大きな思ひ出の記

改造社退社を機に古木鐵太郎は、徐々に執筆に専念するようになる。

では、古木はどのような作品を執筆・発表したのか。

まず、古木鐵太郎は、敬愛する葛西善蔵同様に「自己」を描く作家である。

実際古木の作品は、小説であれ随筆であれ、自分の家族や子供のころの思い出を題材にしたものが圧倒的に多い。その多くは一人称単数(「私」あるいは「僕」)で書かれている。古木鐵太郎は「私小説家」である¹⁶⁾。

さらに厳密に言うならば、古木の作品は思い出を「題材にして創作した」作品というよりは「思い出をそのまま記録した」作品である。そして、古木は葛西善蔵のように「自己を破壊」しながら書く作家ではない。

結局僕が書けるものはみんな思ひ出でしかない。その思ひ出を如何に書けるかといふことが問題であるのは勿論だが、僕は一つ、大きな思ひ出の記を書いてみたいのである。¹⁷⁾

「大きな思ひ出の記」が長編小説を意味するならば、古木の思いは実現しなかった。なぜなら古木鐵太郎の作品群に

は、長編作品が一つもないからだ。比較的長い代表作「子の死と別れた妻」でさえ、四百字詰め原稿用紙に換算すると120枚程度である。古木が書いた作品は、すべて短編か掌編作品ということになる。

父・古木鐵太郎の作品について、長女のこきかほるは次のように述べている。

(太平洋戦争後)父が戻ってきたとき世の中は様々変わっていて、私小説などどこかに枯れ、沢山の若い才能が咲き始めていた。彼等が目指すのは、海外に通じる大きく立派な物語だろう。それでも父は「私の小さな説」を書き続けて、家の生活は次第に窮していった。¹⁸⁾

「私の小さな説」という言い方は、古木の作品世界をよく表現している。実際、古木鐵太郎の書く作品は、「私」を題材にしており、作品分量的にも内容的にも「小さな」もので、「物語」「作り話」というよりは「説明」である。しかも、古木の作品は、どれも「何の飾りもない自由な文章」で書かれている。そこに「巧みに仕組まれた虚構」めいたものは感じられない。

そのためか、古木の執筆した作品を一つ一つ読んでいくと、次第に読者は、古木鐵太郎の人生の歩みそのもの、言わば「古木鐵太郎の歴史」を知ることになる。結果的に、古木の全作品を一まとまりにすると、それが多くの「私の小さな説」の集まった一つの「大きな思ひ出の記」というべき一人の人間の生活記録、思い出の集大成が姿を現すのだ。

次に古木の「大きな思ひ出の記」の一つ、「ひと夏の記憶」を取り上げて、古木鐵太郎の作風を見ていこう。

3. 「ひと夏の記憶」について

3-1 あらすじ

古木鐵太郎作「ひと夏の記憶」は、1932(昭和7)年、『麒麟』に発表された。古木の全作品中6番目に発表された最初期の作品である。

短い作品であるが、四章で構成されている。その内容は次の通りだ。

第一章——主人公「私」が時子(モデルは最初の妻村上のぶ)と同棲し始める。「私」が昔付き合っていた女性に対する時子の嫉妬、時子の妊娠と流産が描か

れる。

第二章——時子の退院後、「私」は郷里にいる父の死の知らせを受け取る。「私」は郷里に旅立つ。

第三章——故郷に帰った「私」の墓参りや父に対する回想。故郷滞在中に関東大震災が起きる。その知らせを受けた「私」は、徐々に不安に駆られて、ついには東京に戻ることにする。

第四章——東京に戻った「私」は時子と再会する。

3-2 時子の妊娠

初めて「ひと夏の記憶」を読んだ時、二つの重要だと思える場面について呆気にとられてしまった。と言うのも、そこでは大きな出来事が起きているにもかかわらず、その描き方が肝心なところを避けているように思えたのだ。そして、あまりにも淡々と話が進んでいく。作家としてまだ書き残されていないのだろうか、などと思ったりもした¹⁹⁾。

「ひと夏の記憶」でそのように感じた場面の一つに時子の妊娠をめぐるくだりがある。

時子に妊娠を告げられた「私」は次のように反応する。

ある時彼女は私^{むか}に対つて、どうも妊娠したようだと言ふのだった。彼女は如何にも萎れた様子でそれを云つたが、心の奥では流石に淡い嬉しさを秘めてゐるかの様だった。そして彼女は私にもそれを喜んで貰へるだろうと待つてゐる風だった。所が彼女とは反対に、それを聴いて私は吃驚してしまつた。「これは困つたことになつてしまつた」と思つた。私は彼女の前で深い溜息をついた。²⁰⁾

ひどい男である。そこでそのあと二人の間にひと悶着ある、と予想するのは、通俗的な読み方だろうか。時子が号泣するとか、怒り狂うとか、二人の言い争いが始まるとか²¹⁾。

実際はどうか。主人公「私」のこのような態度に対して、時子はどう反応したのか。そのことを古木は全く描写しない。古木が描くのは、結婚前にまずいことになった、結婚を急がねば、という「わたし」の個人的な思いだけである。

その後、時子の流産と入院が描かれる。そこでも「子供が産まれないといふことは嬉しいが、流産の大事なことを前に聴いてゐたので、私はどうしたらいいかと狼狽してしまつた」などと、「私」の気持ちは吐露される²²⁾。しかし、肝心の時子の様子についての描写はない。

3-3 関東大震災

本作で描かれるもう一つの大きな出来事は関東大震災である。

「ひと夏の記憶」第三章では、父の死の知らせを受けて、兄とともに故郷の自家に着いた「私」が、父の最後についての話を聞いたり、墓参りをしたりする²³⁾。そこで「私」は関東大震災のことを知る。

翌日も、私達は皆で墓参りに出かけて行つた。そしてまた打連れて帰つて来ると、小学校の石垣の曲り角に今しがた貼られたらしい貼札を見て私達は吃驚した。それはあの時の関東の大地震を報じたものだつた。²⁴⁾

その後「私」は、新聞報道などから次第にその地震が深刻な被害をもたらしていることを知り、時子の身を案じるようになる。そして、「私」は東京に戻ることにする。

第四章は「私」が新宿駅に着いたところから始まる。

私達が新宿駅に着いたのは、(東京に近い東海道線が不通になつてゐるため、私達は名古屋駅から中央線に乗換へて来たのだつた)地震後十日目位に当たる天気の良い正午頃だつた。私は駅から出て来ると、すでにその辺の一角も焼かれてしまつてゐるのを見て吃驚した。(中略)私は兎も角もすぐ其所にゐた俵夫をとらへ、小石川のわたしの下宿へと向かはせた。俵は其所から真直ぐに裏通りを進んで牛込を抜けて行つた。²⁵⁾

「私」は人力車に乗って、被災地東京を新宿駅から小石川のあたりまで行く。どのような道を通つたか詳しく説明されないが、少なくとも6-7キロは移動したはずである。それなりに時間もかかるだろう。当然ながら「私」は、被災地の様々な光景を目にするはず。しかしながら、古木が描くのは、二つのことだけだ。まず「私」が俵夫に下宿のある町の被災状況を尋ねる。俵夫の説明もごく簡単だ。やがて目的地に近づいてくると時子がかつて入院していた病院が焼けていないか見る。そうするうちにたちまち小石川の下宿の露地口に到着してしまう。

さらに下宿で時子が実家に帰つたことを知つた「私」は、下宿から「十五六丁」(約1.6キロ)の距離を歩いて会いに行く。ここでも古木は周囲の風景を描かない。

目に映るはずの被災地の風景や人々をなぜ描かないのだろうか。何も「鬼面人を威す」様な描写を求めているわけではない。しかし、物語の流れからも、最初一枚の貼り紙でしか知りえなかった関東大震災について、募る不安を経て、実際の現場を目の当たりにしたときに、そこに何があったのか、何を感じたのか、もう少し詳しく描いてもいいのではないか。

言葉は悪いかもかもしれないが、ここぞという所で古木の筆は、まるで自主規制をしているかのように躊躇しているのではないか。

時子の妊娠告白や関東大震災後の東京を描く場面では、古木鐵太郎という書き手の「煮え切らなさ」が見えるような気がしたのである。

しかし、古木鐵太郎の多くの作品を読み進めるほどに、この「どこか煮え切らないところ」がその作品世界の最大の特徴なのかもしれない、と思えるようになった。

4. 「相変わらず」の世界を描き続ける

4-1 何でもない調子

「ひと夏の記憶」で描かれる同棲相手の妊娠・流産、父の死、関東大震災。普通に生きている人であるならば、誰でも強烈に記憶に刻まれる出来事の連続である。「私」を題材にする小説家であるならば、ここぞと腕が鳴るところではないか。

ところが古木鐵太郎は、ほぼすべてをさらりと描いている。しかもこれは「ひと夏の記憶」だけに見られる作風ではなく、古木のすべての作品に共通する作風なのである。

「ひと夏の記憶」の一年後に発表された「其の後」に対する書評で、小林秀雄は、古木作品について「なんでもない調子が飽くまでもなんでもない調子」であるところがあるとして、「愉快でない」と述べている²⁶⁾。「愉快でない」とは、いささか辛らつな言葉である。

また、古木が1936(昭和11)年に発表した「^{ちび}郁子」をめぐる、伊藤整は、古木のことを「苦手な作家」と述べ、「色気のない作家」と評している²⁷⁾。

両者の評価は、ある意味、的を射ている。要するに古木鐵太郎の作品には、時に私小説家たちが身を削ってでも出すような「毒がない」のである。

一方で、「継続は力なり」と言うべきか。「色気もなく」「なんでもない調子が飽くまでもなんでもない調子」であり続

けたことによって、古木鐵太郎の作風は確立されたのだ。

4-2 遠慮がちな作家

古木鐵太郎の作品の持ち味について、どう伝えるべきか。渋川驍は、古木鐵太郎の叙述の方法について、「情景や心理を大局的に判断して表現する方法」である、と述べている。そして、「普通なら惜しいと思うような行為や出来事も大胆に切り捨ててゆく」。そのことにより、古木の叙述は素朴で簡潔で平明なものになっていると言う。しかも非常に思い切りがいいと²⁸⁾。

渋川の指摘を「ひと夏の記憶」に当てはめて考えるならば、妊娠告白への「私」の露骨な落胆に対する時子の反応が描かれないことや、関東大震災後の震災地東京の光景について踏み込んだ描写がないことについても、古木は「情景や心理を大局的に判断して」「思い切って」描くことをやめた、ということになる。

さらに古木の「大局的な判断」の基準として、「その文章の底には作家としての倫理観が働いていて、軽薄になる表現を抑止している」。

「倫理観」という言葉も古木の作風を考える上で、重要な要素だ。いささか難しい用語であるが、かみ砕いて考えるならば、それはいかにも日本人的な「恥じらい」や「遠慮」である。あるいは「何かを赤裸々に暴露するのを抑える気持ち」とでも言おうか。少なくとも古木鐵太郎は、破廉恥極まる行為や人に言えない胸の内を暴露することで、逆に被虐的快感を得るような「自己を破壊」して書く作家ではないのである。

「倫理観」についてさらに補足するならば、雑誌記者出身であるにもかかわらず、古木は社会情勢にあまり関心を抱かない作家でもある。古木が執筆した時代は、日本の首都東京が関東大震災に破壊され、その後、軍部の台頭で日本が戦争へと向かい、そして、敗戦する時代と重なり合う。その時代の影響というものを当然ながら考えるべきだと思うのだが、古木の作品世界からは、いわゆる時代のうねりや影のようなものが、読み取れない。戦時中、古木鐵太郎とその家族は、子供たちも含めて、東京にとどまっていた。古木の作品には、空襲やその焼け跡についての言及も数多くあるのだが、それらもごくありきたりの日常の一部のように描かれている。そのように感じられるのは、おそらく「思い切って描くのをやめた」ところがあるからだろう。

結果的に、社会情勢に対して無関心であること(あるいは

無関心を装うこと)によって、古木の作品は時代を超越したものとなり、いつの時代でも読まれるものになったのではないか、と渋川は述べている。

古木鐵太郎作品について何か理由を求めて分析すると、おそらく以上のような見方になるだろう。

一方で、古木自身が、そのように「企んで」(判断して)執筆していたかどうか。そのようなことはないだろうと思えるのである。

むしろ「企み」とは、正反対の「素直さ」が、古木の作品世界からはにじみ出ている。二十歳を過ぎてから、文学を知ることになった青年が、「自分の書きたいことをまず書いてみようか」という、いわば遠慮がちな初心のままですっと書き続けたらどうなるのか。そして、初心は初心のまま、野心は生まれなかったとしたら。

失礼な表現かもしれないが、古木鐵太郎の「素人っぽさ」に引かれて、筆者はその作品群を読んできたのである。その結果、立ち現れたのは「間の抜けた重厚さ」²⁹⁾のある「大きな思ひ出の記」だった。

そして、振り返って、作品が放つ「素直なまなざし」を古木鐵太郎の顔写真からも感じられる、と言うとこじつけが過ぎるだろうか。

むすび

死の直前、(古木鐵太郎は)「おれはこれでいいのだ」と夫人にもらしたそうであるが、この一言を思ひ出して、私は時時涙ぐむことがある。³⁰⁾

有名であるかないか、と問われるならば、古木鐵太郎は紛れもなく無名作家である。その作品を書店や図書館で手軽に見つけられる作家ではない。大手出版社の文学全集で、その他大勢と抱き合わされて一巻を構成する、その頭数にも入らないような作家である。一方で、まぎれもなく正論でありながら忘れがちなことであるが(忘れていたふりをしがちであるが)、無名であることや売れていないことが、作家とその作品の文学的価値に等しいという等式は成り立たないはずだ。

幸いにして無名作家古木鐵太郎には、家族がいて、仲間がいた。志賀直哉から近所の理髪師に至るまで、古木の作品には古木が出会った有名無名の人々が登場する。その人々について、古木は誰一人として悪く書かない。「なんで

もない調子がなんでもない調子」であり続ける古木の作品世界では、悪役の居場所はないのである。

だから、古木の文学仲間や家族は、「相変わらずだな」と思いながら、ついつい自分たちのことも含めて読んでしまう。人は自分に関係のあるものには心惹かれるものだろう。そこに悪意がなければなおさらのこと。そして、親族や文壇の仲間たちの記録に残しておきたいという思いから、作品集が編纂される。売れるかどうかという問題とは関係なく、人に愛着を抱かせる何か古木の作品にはあるのだ。

文壇の仲間や親族の尽力により、古木の執筆作品はもとより、同時代及び全集出版に至るまでの書評などを網羅した『古木鐵太郎全集』(全三巻および別巻)(古木鐵太郎全集刊行会、1988年5月および1992年10月)が刊行されている。古木鐵太郎を再評価するための材料は揃っている³¹⁾。

作家もいろいろ異なつてゐるから面白いのだ。作家はその特質を十分に生かし、完成に近づく可きである。また、その特質以外に出られるものではないのだ。(中略)筋の無い小説は筋の無い小説でそれを立派にして行く可きであると思つた。そして、またこれは唯一最上の武器であると思つた。

私小説の問題などについても、同様のことが云へると思ふ。³²⁾

古木鐵太郎は、筋の無い小説を立派に書き続けた作家である。

註

- 1) かがしま近代文学館が「古木鐵太郎展」のために制作したチラシである。
- 2) 古木鐵太郎が上京するまでの経歴について少し補足しておきたい。古木鐵太郎は、1899(明治32)年7月13日、鹿児島県宮之城村にて、父・高、母・ツルの六男として生まれた。鹿児島県立川内中学校を卒業後、実業方面に進むつもりだった鐵太郎は、神戸高等商業学校を受験したが不合格。翌年、熊本高等工業高校を受験したが、これにも失敗する。仕方なく、郷里に近い小学校の代用教員を一年半ほど勤めた後、父同士が懇意であった縁で山本實彦を頼って上京した。『古木鐵太郎全集 三巻』(以下『三巻』と略す)、『古木鐵太郎全集』刊行会、1988、373-389頁の年譜参照。
- 3) 厳密には第八回芥川賞(昭和13年下半期)の最終候補作の一つに選ばれたわけではない。候補であるのは確かだが、「最終候補の候補作」の一つに数え上げられていた。永井龍男『回想の芥川賞・直木賞』文藝春秋、文春文庫、1982、91-93頁参照。
- 4) 古木鐵太郎没後、その作品は評価されたのか。必ずしも評価されたとは言えない。古木鐵太郎を扱った最近の論考の中で伊藤博は、「現在では、古木文学はほとんど忘れ去られている」と言ってよく、「継続的に読み継がれていると言いはし難い」と指摘している。実際、作品発表時の書評などと比べて、没後、古木鐵太郎とその作品を扱った論考は極めて少ない。作者没後の古木文学の評価については、伊藤博「状況への態度決定——古木鐵太郎の背徳小説『吹きぶり』」『私小説というレトリック』鼎書房、2019、31-54頁参照。いずれにせよ、古木鐵太郎の個々の作品や古木文学の全体像の評価については、同時代の他の作家たちとの関係性も含めて、取り組むべき余地が十分にあるのではないかと、というのが筆者の思いである。
- 5) 松原一枝『改造社と山本実彦』南方新社、2000参照。
- 6) 古木鐵太郎「文学的な思ひ出」(『大正の作家』桜楓社、1966年初出)、『三巻』、164頁。
- 7) 同上。
- 8) 同上。
- 9) 同上、160-161頁。
- 10) このとき葛西善蔵が執筆した作品は、「湖畔手記」という題名で、1924(大正13)年『改造』11月号に掲載された。
- 11) ドナルド・キーン「私小説」『日本文学史—近代・現代篇五』、中央公論社、2012、32頁。
- 12) 古木鐵太郎「葛西善蔵」(「酒仙葛西善蔵氏の断片的追憶」改題、『徳島毎日新聞』1935年1月初出)、『三巻』、180-181頁。葛西善蔵作「椎の若葉」(原題「椎樹の若葉」)は、1924(大正13)年『改造』7月号に掲載された。
- 13) 古木鐵太郎「山の花」(『月刊文章』1942年3月初出)、『古木鐵太郎全集 二巻』所収、『古木鐵太郎全集』刊行会、1988、137-138頁。
- 14) 古木鐵太郎の作品には、子供のころの読書体験を描いたものがほとんどない。それどころか「小学校の時私は綴方は

一番嫌ひな学科だった」。唯一、中学に入った後、教師が謄写版で刷った田山花袋や国木田独歩の作品を読んだこと、田山花袋の文章に親しみを覚えたことについての言及がある。「しかし、わたしはその時自分が小説家になろうなどとは勿論少しも考えていなかった」。古木鐵太郎「文学的な思ひ出」『三巻』、162-163頁参照。

- 15) 古木鐵太郎「秋雨」(『日本の風俗』1941年5月初出)、『古木鐵太郎全集 一卷』(以下『一卷』と略す)所収、『古木鐵太郎全集』刊行会、1988、237頁。また、「何故書くか」(『鶴』1934年4月初出、『三巻』、331頁)では「仕事の関係から自然小説を読む機会が多くなり、たまたま自分にしつくり来る作品を読むと自分も小説を書いてみたいといふ気持ちになりました」とも述べている。
- 16) 古木の作品は、その扱っている題材からつぎの6つに分類できる。①幼い頃の思い出、郷里の家族の昔と今、②雑誌『改造』在籍時代及び文壇関係者、③最初の妻村上のぶとの出会い、結婚生活、長男誕生、結婚生活の破綻、④長男夏郎の死、⑤二人目の妻小林すゑとの出会い、結婚生活、⑥小林すゑとの間に生まれた子供たち。古閑章「郷愁の文学者・古木鐵太郎」『新薩摩学11—郷愁の文学者古木鐵太郎作品集・郷土文学篇』南方新社、2015、44-45頁参照。古閑は古木の作品を5つに分類している。筆者の分類と比べて、「長男夏郎の死」という項目がない。おそらく村上のぶのものに含めているのだろう。
- 17) 古木鐵太郎「思ひ出」(『木靴』1936年1月初出)、『三巻』、145頁。
- 18) こきかほる「お父さん本当にゴメンナサイ」『新薩摩学11—郷愁の文学者古木鐵太郎作品集・郷土文学篇』、23頁。古木鐵太郎は、戦中・戦後の1944(昭和19)年から1947(昭和22)年まで、通信院(現総務省)総務局要員課嘱託として機関紙『大通信』の編集に携わっている。古木家は家族全員戦中も東京で暮らし続けた。古木に軍役経験はない。
- 19) 筆者は古木鐵太郎の作品をほぼ執筆年代順に読んだ。「ひと夏の記憶」を初めて読んだのは、まだ古木作品に関する読書経験が浅かったころである。
- 20) 古木鐵太郎「ひと夏の記憶」(『麒麟』1932年8月初出)、『一卷』、29頁。
- 21) 例えば古木の敬愛する葛西善蔵の「蠢く者」(『改造』大正13年7月)を想起していただきたい。そこでは、愛人おせいの妊娠と流産をめぐる、「私」(葛西善蔵)とおせいが激しく罵りあう。「私」のおせいへの暴力も描かれる。
- 22) 同上、30頁。
- 23) これに先立つ第二章では、父の死の知らせを聞いてから「私」が旅立つまでが描かれる。その最初のくだりに印象的な出来事が書かれている。「私達は或る氷屋に入った。すると、私達のすぐ後から六十位と見える一人の老人が入って来た。私は氷水を飲みながら何気なく卓の下に延ばされた老人の足を見ると不図、それが私の父の足そつくりであるのに気づいた。そして私は最近に珍しい程父のことがしみじみ思ひ出された」(『一卷』、31頁)。その後下宿に戻

って寝ていた「私」に父の死の知らせが届く。引用した氷屋での出来事は、「私」の父の死の予兆であるかのように淡々と描かれている。それにしても足を見て父の足そっくりだと思ふ、というのは独特な感覚ではないだろうか。

- 24) 同上、37頁。
- 25) 同上、39頁。
- 26) 小林秀雄「古木鐵太郎氏の『其の後』」(『東京日日新聞』<作品評>1933年10月)、『古木鐵太郎全集 別巻』(以下『別巻』と略す)所収、『古木鐵太郎全集』刊行会、1992、127頁。
- 27) 伊藤整「『郁子』評」(『ペン』<文芸時評>1937年1月)、『別巻』、191頁。
- 28) 渋川驍「解説」『三巻』、339–371頁参照。
- 29) 佐藤春夫『紅いノート』叙(古木鐵太郎『紅いノート』校倉書房、1959年11月初出)、『別巻』、284頁。古木鐵太郎の二番目の妻小林すゑは、佐藤春夫の妻千代子の妹である。古木は、改造社在籍時、谷崎潤一郎邸に原稿を受け取りに行った時、すゑと初対面した。このとき千代子は谷崎夫人だった。
- 30) 木山捷平「追悼・思ひ出」(古木鐵太郎『折舟』校倉書房、1966年3月初出)、『別巻』、344頁。
- 31) 少なくとも作家の地元やゆかりの土地では、「古木鐵太郎という作家がいたこと」が見直されつつある。冒頭に紹介した「没後60年 古木鐵太郎展」(かごしま近代文学館)以外に、2005(平成17)年に生誕地である鹿児島薩摩郡宮之城町(現・さつま町)宮之城歴史資料センターで「古木鐵太郎の文学と交友展」、2014(平成26)年には中野区立中央図書館で「古木鐵太郎の文学散歩」、同鷺宮図書館で「鷺宮をあるいた私小説家・古木鐵太郎展」が開かれている。古木は、小林すゑとの再婚後、西武新宿線の野方から鷺宮、中央線の高円寺の近隣地域の借家を転々とする。最後の落ち着き先は中野区鷺宮だった。また同年、鹿児島県薩摩郡さつま町役場(古木鐵太郎生家跡地)に生誕の碑が建立された。
- 32) 古木鐵太郎「巨匠の言葉」(『不同調』1947年11月初出)、『三巻』、143頁。

A Representation of an I-novelist: Life and Works of Koki Tetsutaro

YOKOYAMA Shuichiro

Koki Tetsutaro (1899–1954) was a Japanese novelist and short story writer active during the Taishō and Shōwa periods of Japan. He began his career as a journalist with *Kaizō*, one of Japan's major socialist magazines and publishing companies that created a sensation in the literary world of the late 1920s. He worked with many writers, namely Mushanokoji Saneatsu, Shiga Naoya, and Kasai Zenzō.

After six or seven years of working as a journalist of *Kaizō*, Koki began to write fiction and his first story *Nikko Yumoto nite* (At Nikko Yumoto) written under the influence of Kasai Zenzō in 1926 was published in 1931.

Koki is generally considered as an “I-novelist.” “I-novel” is the most striking feature of modern Japanese literature and a literary form that uses the author's subjective recollection of his own experience; however, there is little agreement as to what distinguishes it from other kinds of autobiographical fiction.

Many “I-novel” writers, including Kasai Zenzō, tended to derive a masochistic pleasure from disclosing not only their contemptible actions but also shameful thoughts that never overtly manifested themselves and sacrificed their family to create.

Koki had respect for Kasai but did not write like him. For Kasai, the only way to write his “I-novels” was destroying himself. Koki was a truthful observer of his daily life, and the plots of his short stories—he did not write full-length novels—are directly derived from personal memories and experiences, but with a Japanese reticence stopped short of full revelations.

Although Koki's “I-novels” were not widely read, it does not signify his inability of creating original works; his works are testaments of his sincerity and constitute his personal world.